

令和2年度病害虫発生予報第9号の発表について

このことについて、次のとおり発表したのを送付します。

《予報の概要》

作物名	病害虫名	予想発生量
カンキツ	カイガラムシ類 (ヤノネカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ等)	並
	ミカンハダニ	やや少
カキ	フジコナカイガラムシ	多
	カキノヘタムシガ	やや少
ブロッコリー	黒腐病	やや少
	花蕾腐敗病	並
	べと病	やや少
	菌核病	やや少
レタス	灰色かび病	並
	菌核病	やや多
	腐敗病	並
	斑点細菌病	やや少
	モザイク病 (えそ輪紋症状を含む)	やや少
	ナモグリバエ	やや少
野菜、花きの 共通害虫	アブラムシ類	並
	コナガ	やや少
	タバコガ類 (主にオオタバコガ)	並

太文字の病害虫：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病害虫を示す。

*予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

令和2年度 病害虫発生予報 第9号(12月)

A. 果樹の病害虫

－カンキツ－

1. カイガラムシ類（ヤノネカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ等）

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 秋期のヤノネカイガラムシの発生は認めず(－)、ナシマルカイガラムシの発生は平年と同様に認めなかった(±)。

(2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)

対 策 (1) 越冬期の密度を下げるため、冬期防除を必ず実施する。

(2) マシン油乳剤の散布は晴天の続く風のない日を選び、散布むらのないように丁寧に行う。なお、樹勢が弱い樹では散布を避ける。

2. ミカンハダニ

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 一般圃場での11月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

(2) 12月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 越冬期の密度を下げるため、冬期防除を必ず実施する。

(2) マシン油乳剤の散布は晴天の続く風のない日を選び、散布むらのないように丁寧に行う。なお、樹勢が弱い樹では散布を避ける。

－カ キー

1. フジコナカイガラムシ

予 想 発生量 : 多

根 拠 (1) 一般圃場での秋期の果実での発生量は多かった。(＋)

(2) 一般圃場での秋期の枝での発生量はやや多かった。(＋)

対 策 (1) 越冬期の密度を下げるため、冬期防除と1月から2月に粗皮削りを実施する。

(2) マシン油乳剤の散布は晴天の続く風のない日を選び、散布むらのないように丁寧に行う。

2. カキノヘタムシガ

予 想 発生量 : やや少

根 拠 一般圃場での秋期の発生量はやや少なかった。(－)

対 策 越冬期の密度を下げるため、1月から2月に粗皮削りを実施する。

B. 野菜、花きの病害虫

－ブロッコリー－

1. 黒腐病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりでの発生量はやや少なく(－)、年明けどりでの発生は認めなかった(－)。

(2) 12月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。

(2) 降雨や強風の後にはできるだけ速やかに薬剤防除を行う。

2. 花蕾腐敗病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりででの発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 12月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 薬剤防除は予防的に実施する。

(2) 銅剤を使用する場合には薬害軽減のために炭酸カルシウム剤を加用する。

(3) 降霜などによって発病が助長されるので、低温が予想される場合には防霜対策を施す。

3. ベと病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 11月下旬の発生は年内どり、年明けどりとともに認めなかった。(－)

(2) 12月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。

(2) 降雨後や曇雨天で多湿状態が続くときは薬剤防除を行う。

(3) 花蕾の発病を回避するため、発蕾前に予防的に薬剤防除を行う。

(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

(5) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外で適正に処分する。

4. 菌核病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりででの発生量は平年並(±)、年明けどりででの発生は認めなかった(－)。

(2) 12月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外で適正に処分する。

(2) 発生が多い圃場では連作しない。

－レタス－

1. 灰色かび病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりででの発生は平年と同様に認めず(±)、年明けどりで発生を認めなかった(－)。

(2) 防除員報告では年内どり及び年明けどりで発生量のやや多い地区があった。(＋)

(3) 12月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って適正に処分し、直ちに防除を行う。

(2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。

(3) 定植7～10日後と25～35日後を基幹防除時期とするが、トンネル被覆後は薬剤がかかりにくくなるので、散布むらに注意して薬剤防除を行う。

(4) 苗床からの持ち込みを防ぐため、苗床での薬剤防除を行う。

(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 菌核病

予 想 発生量 : やや多

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりででの発生量はやや少なかった(－)、年明けどりででの発生量はやや多かった(＋)。

(2) 防除員報告では年明けどりで発生量のやや多い地区があった。(＋)

(3) 12月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外で適正に処分する。
(2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
(3) 灰色かび病防除に準じて対策を実施する。
(4) 灰色かび病の耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(5) 発生の多い圃場では連作しない。

3. 腐敗病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 11月下旬の発生は年内どり、年明けどりとともに平年と同様に認めなかったが、一部の地域で発生量がやや多かった。(+)

(2) 12月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) トンネル被覆は遅れないようにするとともに、被覆前には薬剤防除を行う。
(2) 凍霜害にあった場合は速やかに薬剤防除を行う。
(3) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。

4. 斑点細菌病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりでの発生は認めず(-)、年明けどりでの発生は平年と同様に認めなかった(±)。

(2) 12月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 育苗は風当りの少ないところで行い、できるだけ傷をつけないように管理するとともに、軟弱徒長にならないよう注意する。
(2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
(3) 強風を伴う降雨が続いた後及びトンネル被覆前には薬剤防除を行う。

5. モザイク病(えそ輪紋症状を含む)

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりでの発生量はやや少なく(-)、年明けどりでの発生は認めなかった(-)。

(2) 11月下旬のアブラムシ類の年内どりでの発生量は平年並(±)、年明けどりでの発生は認めなかった(-)。

(3) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での11月の誘殺数は過去9か年の平均並であった。(±)

- 対 策 (1) 苗床及び被覆前のアブラムシ防除を徹底する。
(2) 発病株は、早期に抜き取り適正に処分する。
(3) 定植時には、アブラムシ類を対象に粒剤または灌注処理をする。
(4) アブラムシ類の薬剤防除を行う場合には、抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

6. ナモグリバエ

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりでの発生量は平年並(±)、年明けどりでの発生は認めなかった(-)。

(2) 12月の気象は気温が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。
(2) 葉に食害を認める場合は、被覆前に防除を行う。
(3) 定植時には、粒剤または灌注処理をする。

－野菜、花きの共通害虫－

1. アブラムシ類

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 11月下旬の発生量は年内どり、年明けどりブロッコリーでやや少なく(－)、年内どりレタス、冬ニンジンで平年並(±)、年明けどりレタスでの発生は認めなかった(－)。

(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での11月の誘殺数は過去9か年の平均並であった。(±)

(3) 防除員報告では年内どりレタス、イチゴ、キクで発生のやや多い地区があった。(＋)

(4) 12月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 施設栽培やトンネル栽培等では、今後増殖するおそれがあるので注意する。

(2) モザイク病の初期感染を防ぐため、苗床での防除を徹底する。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. コナガ

予 想 対象作物 : アブラナ科野菜、ストック等

発生量 : やや少

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりブロッコリーでの発生は認めず(－)、年明けどりブロッコリーでの発生量は平年並であった(±)。

(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの11月の誘殺数は過去9か年の平均に比べやや少なかった。(－)

(3) 12月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。

(2) 定植時に灌注処理や粒剤を施用するとともに発生初期から薬剤防除を行う。

(3) 一部の薬剤に対して抵抗性の発達が認められるので、平成27年度調査速報第12号 コナガの薬剤感受性検定 (<http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>) 等を参考に作用性の異なる薬剤で防除する。

3. タバコガ類 (主にオオタバコガ)

予 想 対象作物 : レタス、キク、ナス、ミニトマト、トマト等のトンネル及び施設栽培作物、ブロッコリー

発生量 : 並

根 拠 (1) 11月下旬の発生は年内どり、年明けどりレタスで平年と同様に認めず(±)、年内どりブロッコリーでは平年並(±)、年明けどりブロッコリーでの発生は認めなかった(－)。

(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの11月の誘殺数は過去9か年の平均に比べやや多かった。(＋)

(3) 12月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 圃場を見回り、幼虫や食害等を確認すれば薬剤防除を行う。

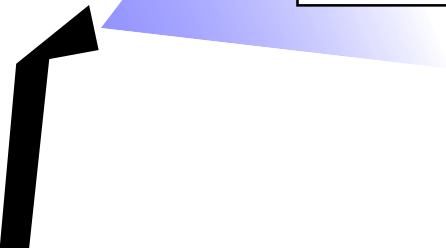
(2) レタス等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、発生初期ならびに結球始期の防除を徹底する。

(3) 幼虫の齢期が進むにしたがって薬剤の殺虫効果は低くなるため、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。

(4) 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう、丁寧に散布する。

(5) 一部の薬剤に対して抵抗性の発達が認められるので、平成25年度調査速報第5号 オオタバコガの薬剤感受性検定 (<http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>) 等を参考に作用性の異なる薬剤で防除する。

(6) 被害果実、被害茎葉、収穫残さなどは放置せず圃場外へ持ち出して適正に処分する。

- 
- ・住宅地等に接した地域及び広範囲に防除する場合は、散布する前に付近住民などに周知するとともに、飛散しにくい農薬を使用するようにしましょう。
 - ・農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して飛散防止を心がけましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>